

# 韓國中等教育の教科書に見られる 『三國遺事』の史實化\*

朴正義\*\*

---

## 目次

---

- 1.はじめに
  - 2.檀君の古朝鮮建國に見られる『三國遺事』の史實化
  - 3.『三國史記』と『三國遺事』を互いに補完し古代史の組み立て
  - 4.おわりに
- 
- 

## 1.はじめに

本人は、完結した一個の文學作品として『三國遺事』を見る。今まで『三國遺事』は、歴史書としてみるか、説話を単に集めたものとしてみるか、どちらにしても當然部分部分に意味をなすものとして、解體され研究が進められてきた。それに反し、本人は全體を一つの思想によって完結した文學作品ととして『三國遺事』をとらえる。そしてその思想とは、『三國遺事』がいかに世界を見たのかである。そして、それは當時の人々が納得し得た世界觀。純粹に民間傳承されてきたのではなく、國家または個人においても意圖的に書かれた史書は、そこに國家民族を保障すべくその時代の人々を納得させうる世界觀を模索し續けた。日本では、『古事記』『日本書紀』の根本である「天皇を中心」とする世界觀を時代に合わせ創造してきた。このことは、神野志隆光氏がすでに明らかにするところである。1)

近來神野志隆光氏は、今まで元々一つの神話というものが存在しそれからいろいろな神話が派生したことを前提とする一元的神話論を改め、『古事記』は『古事記』として『日本書紀』は『日本書紀』として見る、つまりすべて別々の神話であるとの多元的神話論でもって、それぞれ全體として表れる世界觀の解明に成功をおさめ、現在これが主流となりつつある。それは、『古事記』や『日本書紀』など純粹に歴史書として見るのではなく、つまり歴

---

\* 이 연구는 원광대학교 2004년 교내학술연구비의 지원에 의하여 이루어진 것임.

\*\* 圓光大學校 日語教育科 教授 日本學

1) 朴正義(2001年)「天皇を保障した『古事記』」、『日本學報』第46輯 韓國日本學會。

史的事実としてではなく文學として、そこに現れた世界觀を追求し、さらにその世界觀から當時の人の理念を探り、何故そのような世界觀が生まれたか、當時の状況を把握するものである。

古代東アジアは中國王朝が世界の中心であるという價值觀即ち中華思想の基に秩序が保たれ、それを統括していたのが中國の皇帝といえる。しかし、中國を中心とする世界觀に反し、東アジアの諸國は内にあって中國とは別の世界觀を模索し續けてきた。特に東アジアの當時の先進國であり現在にまでその國體を維持してきた韓國・日本は、それが顯著といえる。これを現在にまで物語るのが、日本では『古事記』『日本書紀』、韓國では『廣開土王碑文』『三國遺事』『三國史記』である。これらの書は確かに歴史書としての形式を保つが、書かれた時期の國家の理念を完成するのを目的として記されており、つまり書かれた當時の國家の保障と永遠の繁榮を祈念すべく書かれたものといえる。そのため、それぞれ編纂された時代の相違、その時の歴史に對する要求がことなり、結果としてそれぞれ別々の古代史を作り出して來たと言える。即ち、神野志氏が提唱した「多元的神話論」が「史書」にも、少なくとも古代中國文化の影響下にあった東アジア全体一少なくとも韓國と日本一に適用でき、「多元的歴史論」と言える。これは、韓日古代史を語る時、日本側の資料『古事記』『日本書紀』、韓國側の資料『廣開土王碑文』『三國史記』『三國遺事』が、互いに噛み合わず、むしろ韓日古代史を混亂させる結果を招いていることからわかる。

つまり、『三國遺事』は純粹な歴記史書ではなく、そこに全体として完結した思想が存在し、またそこに表れる古代史は『三國遺事』の古代史であり、決して普遍的なものではなく『三國史記』またそれ以外とも異なる古代史である。長々と述べてきたが、以上が私の立場である。

しかし、『三國史記』『三國遺事』の研究史は、史實化の歴史であったと言っても過言でない。その結果が、韓國の高等學校・中學校の「國史」の教科書に明確にあらわれている。韓國の高校・中學校の國史の教科書は、ともに韓國の國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會によって編纂された國定教科書『高等學校 國史』『中學校 國史』のそれぞれ一冊ずつである。本論文は、これら教科書を材料とし、そこに『三國遺事』がいかにかに史實化されているか、また『三國史記』やその他と互いに補完し古代史が組み立てられているかを明らかにするものである。

## 2. 檀君の古朝鮮建國に見られる『三國遺事』の史實化

### 2-1 高等學校の教科書にみられる『三國遺事』の史實化

高等學校の國史の教科書『高等學校 國史』<sup>2)</sup>を見れば、第1章が「韓國史の正し理解」で、韓國史に對する姿勢を示し、第2章「先史時代の文化と國家形成」から韓國史が始まる。まず第2章の第1條「先史時代の展開」で韓國民族のはじまりと形成を語り、第2條「國家の形成」で國のはじまりと形成を説く。第2條の最初の項目の「1古朝鮮と青銅器文化」で、青銅器・鐵器文化の發展を記述した後、檀君の古朝鮮建國を語り、韓半島における國のはじまり、即ち韓國民族の國家形成を説く。この部分を記述すれば下記のごとくである。

#### 檀君<sup>3)</sup>と古朝鮮

青銅器文化の發展にあわせ族長が支配する社會が出現した。この中でも強力な族長は周辺部族を統合しながら、徐々に族長の權力を強化していった。

部族社會において最初に國家として發達したのが古朝鮮であった。『三國遺事』の記録によれば、古朝鮮は檀君王儉が建國したとする(B.C.2333)。檀君王儉は当時の支配者の称号であった。

古朝鮮は遼寧地方を中心に成長し徐々に周辺部族を統合しながら韓半島にまで發展したが、このような事實は琵琶型の銅劍とコインドルの出土分布から知ることができる。古朝鮮の勢力範囲は青銅器時代を特徴づける遺物の一つである琵琶型の銅劍とコインドルが出る地域と深い関係がある。

古朝鮮の建國事實を伝える檀君の話は我が民族の始祖として廣く伝えられてきた。檀君の話は永い歳月にわたり伝承された記録として残されてきた。その間、ある要素は後代に新しく付け加えられもし、時には削除された。

神話はその時代の人々が關心を持つものが反映されたもので、歴史的意味が含まれている。これはすべての神話に共通する屬性である。檀君の記録も同じく、青銅器時代を背景にした古朝鮮の成立を歴史的事實として反映している<sup>4)</sup>。

2) 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等學校 國史」教育人的資源部(文部省)

3) 『三國遺事』では「檀君」となっているが、一般的に「檀君」表記をつけており、ここでは『三國遺事』だけの話でないので、一般的表記「檀君」を使用した。

4) 「청동기 문화의 발전과 함께 족장이 지배하는 사회가 출현하였다. 이들 중에서 강한 족장은 주변의 여러 족장 사회를 통합하면서 점차 권력을 강화해갔다.

족장 사회에서 가장 먼저 국가로 발전한 것은 고조선이었다. 삼국유사의 기록에 따르면 고조선은 단군 왕검이 건국하였다고 한다(B.C. 2333). 단군 왕검은 당시 지배자의 칭호였다.

고조선은 요령지방을 중심으로 성장하여 점차 인접한 족장 사회들을 통합하면서 한반도까지 발전하였는데, 이와 같은 사실은 비파형 동검과 고인들의 출토 분포로써 알 수 있다. 고조선의 세력 범위는 청

以上教科書本文の「檀君の古朝鮮建國」の内容である。まず、「部族社會において最初に國家として發達したのが古朝鮮であった」と、古朝鮮の存在を史實として確認することからはじまる。この証據として、「三國遺事の記録によれば、檀君王儉が建國したという」と、『三國遺事』の記事をあげている。また、琵琶型の銅劍とコインドルの出土も、古朝鮮の存在の証據として擧げているが、これはその当時の國家形成の可能性を示すだけで、檀君の古朝鮮建國の史實を明らかにするものではなく、決して『三國遺事』の記事を裏付けるものでない。どこまでも、檀君の古朝鮮建國を確認できるのは『三國遺事』の記事だけである。また、「ある要素は後代に新しく付け加えられもし、時には削除された」と、檀君の古朝鮮建國の話が伝承の過程において變形されたこと認めながら、「古朝鮮の建國事實を伝える檀君の話は我が民族の始祖として廣く伝えられてきた。檀君の話は永い歳月にわたり伝承された記録として残されてきた」と、その骨格となる話が史實であることを今一度確認している。さらに、これらが神話であることを意識し、神話が歴史を反映するという一般的な屬性を述べ、「檀君の記録も同じく、青銅器時代を背景にした古朝鮮の成立を歴史的事實として反映している」と、やはり檀君の古朝鮮建國を史實として再確認する。

さらに本文は續き、

この時、桓雄部族は太伯山の神市を中心に勢力を伸ばし、彼らは天の子孫であることを唱え自分達の部族の優越性を誇示した。また、風伯・雨師・雲師をおき、風・雨・雲など農耕に關係することを主管させた<sup>5)</sup>。

とある。これは、『三國遺事』の「桓雄は部下三千を率いて太伯山の頂上の神壇樹の下に降りてきて、そこを神市と呼んだ。この人を桓雄天王という。桓雄は風伯・雨師・雲師らを従え、穀・命・病・刑・善・惡をつかさどり、あらゆる人間のことがらを治め教化した<sup>6)</sup>」という

---

동기 시대를 특징짓는 유물의 하나인 비파형 동검과 고인들이 나오는 지역과 깊은 관계가 있다. 고조선의 건국 사실을 전하는 단군 이야기는 우리 민족의 시조 신화로 널리 알려져 있다. 단군 이야기는 오랜 세월을 거치면서 전승되어 기록으로 남겨진 것이다. 그러는 사이에 어떤 요소는 후대로 가면서 새로 첨가되기도 하고 때로는 없어지기도 하였다. 신화는 그 시대 사람들의 관심이 반영되는 것으로 역사적인 의미가 담겨 있다. 이것은 모든 신화에 공통되는 속성이기도 하다. 단군의 기록도 마찬가지로 청동기 시대의 문화를 배경으로 한 고조선일 성립이라는 역사적 사실을 반영하고 있다. 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)『高等學校 國史』教育人的資源部(文部省)p.p.34-35

5) 「이때 환웅 부족은 태백산의 신시를 중심으로 세력을 이루었고, 이들은 하늘의 자손임을 내세워 자기 부족의 우월성을 과시하였다. 또 풍백, 우사, 운사를 두어 바람, 비, 구름 등 농경에 관계되는 것을 주관하게 하였다.」 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)『高等學校 國史』教育人的資源部(文部省)p.35

6) 『三國遺事』卷第一 紀異第一 古朝鮮條「雄率徒三千・降於太伯山頂即太伯山今妙香山神壇樹下。謂之神市。是謂桓雄天王也。將風伯雨師雲師。而主穀主命主病主刑主善惡。」

神話部分の歴史的解釋に他ならない。

また、本文の横にある注釋に「(檀君の古朝鮮建國) 檀君の建國に關する記録は三國遺事・帝王韻紀・東國輿地勝覽などに記載されている) 7)」とある。つまり、『三國遺事』だけでなく、『帝王韻紀』『東國輿地勝覽』も参考にして、本文は書かれていることを暗示している。しかし、『帝王韻紀』8)に記載された檀君の朝鮮建國の記事の内容は、まず「地理紀」で「最初に誰が國を開いたのだろうか。釋帝の孫で、その名は檀君だ9)」で始まり、この檀君に割り注が入っている。その割り注の内容はつぎの通りである。

本紀曰く、上帝桓因に庶子がいたがその名を雄という。桓因がその子に「地上の三危太白に降りて行き、人間を廣く利せよ」といった。それで、桓雄は天符印三つを受け、鬼神三千を従えて太白山の頂上にある神檀樹の下に降りた。この方を桓雄天王という。孫女に藥を飲ませ大人にし、檀樹神と結婚させ、男の子をませた。その名を檀君という。朝鮮の地を治め王となった。こうして、尸羅・高禮・南北沃沮・東北扶與・濊・貊はすべて檀君の治める所であった。1038年治め、阿斯達山に入り山神になり、不死となった10)。

以上『帝王韻紀』の檀君の古朝鮮建國の記事であるが、その内容は『三國遺事』の記事と酷似するが、その中でも二カ所が大きく異なる。まず『三國遺事』では桓雄自身の意志で降る11)のに反し、『帝王韻紀』では桓雄自身の意志は示されていない。教科書ではこの点について記載されていないが、重要なのは「彼らは天の子孫であることを唱え、自分達の部族の優越性を誇示した」12)即ち天の子孫であることで、これに關して『三國遺事』『帝王韻紀』は

7) 「단군의 고조선 건국」 단국의 건국에 관한 기록은 삼국유사 제왕운기 동국여지승람 등에 나타나고 있다. 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)『高等學校 國史』 教育人的資源部(文部省)p.34

8) 『帝王韻紀』は、高麗の忠烈王13年(1287)李承休が64才の時三陟頭陀山に隱居しながら著述した叙事詩である。『三國遺事』の1281年とはほぼ同じ時期に書かれたものである。そして、1295年または1296年發刊され流布されたが、恭愍王の時(1360)再刊、朝鮮時代の太宗17年(1417)に三刊された。この本は上下二卷に分かれ、上卷では中國の盤古から金までの歴史的事實を七言詩で詠い、下卷では韓國の歴史を2部に分けて詠っており、1部「東國君王開國年代」は檀君から後高句麗までの歴史的事實を七言詩で詠い、2部「本朝君王世系年代」では高麗始祖から忠烈王までの歴史的事實を五言詩で詠っている。特に、下卷の檀君に關する記録は、『三國遺事』の檀君記事とともにもっとも古いもので、檀君研究に貴重なものである。(金慶洙譯(1999)『帝王韻紀』図書出版 p.1)

9) 『帝王韻紀』下卷 前朝鮮紀條 「初開國啓雲釋帝之孫名檀君」 (金慶洙譯(1999)『帝王韻紀』図書出版 p.136)

10) 帝王韻紀』下卷 前朝鮮紀條 「本紀曰 上帝桓因有庶子 曰雄云云謂曰 下至三危太白 弘益人間歟 故雄受天符印三箇 率鬼神三千而太白山頂神檀樹下 是謂檀雄天王云云 令孫女飲藥成人身 與檀樹神婚生男名檀君 據朝鮮城尸羅高禮南北沃沮東北扶與濊貊皆檀君之壽也 理千九三十八年 入阿斯達山爲神不死故也」 (金慶洙譯(1999)『帝王韻紀』図書出版 p.136)

11) 『三國遺事』卷第一 紀異第一 古朝鮮條「昔有桓因謂帝釋也庶子桓雄。數意天下。貪求人世。父知子意」とあるように、『三國遺事』では桓雄が元々天下に意を持っており、これをした父桓因が地上に桓雄を送る。

12) 「이들은 하늘의 자손임을 내세워 자기 부족의 우월성을 과시하였다.」 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)『高等學校 國史』 教育人的資源部(文部省)p.35

ともに、桓雄自身の意志はともかく桓因の命で降りてきており、天の意思で國が開かれたことは同じである。ここで重要なことはもう一つの違い、『帝王韻紀』の「孫女に藥を飲ませ大人にし、檀樹神と結婚させ、男の子をませた」の部分である。『三國遺事』では虎と熊が競って人間になることを望んだが、結局熊だけが人間の女に変身し、桓雄と結婚し檀君を生む<sup>13)</sup>。この部分教科書では、つぎのようにになっている。

桓雄の部族は周囲の他の部族を統合していった。熊を崇拜する部族は桓雄の部族と連合し古朝鮮を形成したが、虎を崇拜する部族は連合から排斥した。<sup>14)</sup>

となっており、『三國遺事』の神話部分を歴史的解釋したものである。

さらに、教科書の本文は檀君に續いて『三國遺事』では箕子朝鮮の記事を載せ、その後に衛滿朝鮮の話が續けている。『帝王韻紀』では、古朝鮮を前朝鮮と後朝鮮に分け、前朝鮮を檀君、後朝鮮を箕子朝鮮とし、その後に衛滿朝鮮が續く。『三國遺事』と『帝王韻紀』はあまり異ならないが、やはり『三國遺事』の記事を優先させていることが分かる。

次に『東國輿地勝覽』であるが。これは朝鮮時代初期に書かれた地理書として各地の歴史も同時に記載されているもので、現在残っているのはこれを改修増補した『新增東國輿地勝覽』である<sup>15)</sup>。

・卷1 京都上「檀君は堯帝甲辰年にこの地に國を建て、予め九月山に入ったが、その後のことは分からない<sup>16)</sup>」

・卷42 文化縣の「山川」での九月山の説明において「檀君が最初平壤を都とし、後にまた白岳に移るが、これがこの山だ。周武王が箕子を朝鮮に封じると、檀君は唐藏京に都を移したが、またこの山に還り隠れ、神となった<sup>17)</sup>」

13) 『三國遺事』卷第一 紀異第一 古朝鮮條 「時有一熊一虎。同穴而居。常祈于神雄。時神遣靈艾一柱・蒜二十枚曰。爾輩食之。不見日光百日。便得人形。熊虎得而食之忌三十七日。熊得女身。虎不能忌。而不得人身。熊女者無與爲婚。故每於壇樹下。呪願有孕。雄乃假化婚之。孕生子。號曰檀君王儉」

14) 「환웅 부족은 주위의 다른 부족을 통합하고 지배해 갔다. 곰을 숭배하는 부족은 환웅 부족과 연합하여 고조선을 형성하였으나 호랑이를 숭배하는 부족은 연합에서 배제되었다」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)『高等學校 國史』 教育人的資源部(文部省)p.35)

15) 朝鮮王朝九代成宗(在位1469-1494)の命により盧思慎等が編纂した全55卷22冊からなる朝鮮の地理書で、1481年に『輿地勝覽』として50卷完成。1486年にこれを訂正し『東國輿地勝覽』という名で35卷發刊。1499年改修。1530年李荇等が新増し『新東國輿地勝覽』として刊行。内容は京畿以下各道の沿革・風俗・廟社・陵寢・宮闕・官府・學校・土産の種類と、孝子烈女の行狀と城郭(廓)・山川・樓亭・寺社・驛院・橋梁の位置・名賢の社稷・詩人の題詠まで載せた。1-2卷京都、3卷漢城、4-5卷開成、6-13卷京畿、14-20卷忠清、21-32卷慶尙、33-40卷全羅、41-43卷黃海、44-47卷江原、48-50卷咸鏡、51-55卷平安に分かれている。

16) 『東國輿地勝覽』卷之一 京都上「檀君堯帝甲辰年開國。予此後入九月山。不知所終」(民族文化推進編(1996)『新增東國輿地勝覽1』 舍出版社)

17) 『東國輿地勝覽』卷之四十二 文化縣「檀君初都平壤。後又移白岳即此山也。至周武王封箕子於朝鮮。檀君

・卷51平壤府「本來三朝鮮と高句麗の昔の都。唐堯戊辰年に太伯山檀木の下に降りてきた神人を國の人々は王とし都を平壤に移した。檀君と呼んだ。これが前朝鮮である<sup>18)</sup>」

に檀君の記事が見える。これを見れば教科書が『東國輿地勝覽』を参照した跡が見られない。即ち「(檀君の古朝鮮建國) 檀君の建國に関する記録は三國遺事・帝王韻紀・東國輿地勝覽などに記載されている」と記載されているが、教科書の内容は『三國遺事』の記事だけで構成されている。

つまり高等学校の國史教科書における檀君の古朝鮮建國の記事は『三國遺事』の内容の史實化以外のなにものでもない。

## 2-2 中學校の教科書にみられる『三國遺事』の史實化

次に、中學校の「國史」教科書を見ることにする。すでに述べたように、中學校の「國史」教科書は、國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會によって編纂された國定教科書『中學校國史』<sup>19)</sup>の一冊だけである。この教科書の第1章「わが國の歴史の始まり」の第1條「先史時代の生活」において、韓半島にいつから人が住みだしたのか、つまり民族の起源について語り、續いて旧石器・新石器さらに青銅器時代への変遷を遺跡・遺物を示しながら説明する。しかし、第2條「國家の成立」に入るとその記述は大きく異なる。最初の項目「古朝鮮建國の歴史的意義は？」において「檀君の古朝鮮」と「古朝鮮の成長と変遷」の題目下で本文に檀君の古朝鮮建國が史實として記載されている。まず「檀君の古朝鮮」であるが、その内容は次の通りである。

### 檀君の古朝鮮建國

青銅器文化が形成され、滿州遼寧地方と韓半島西北地方には族長が支配する部族があらわれ始めた。檀君はこれらの部族を統合し、古朝鮮を建國した。

檀君の古朝鮮の建國はわが國の歴史が非常に古いことを物語ってくれる。また、檀君の建國事實と弘益人間の建國理念は、我が民族が危機に面するたび民族の自負心を呼び起こしてくれる原動力となった。

それ以外にも檀君の建國の話を通して我が民族が始めて國を作った時の状況が推測できる。熊と虎が登場することから先史時代に形成された特定の動物を崇拝する信仰の要素が反映されていることが分かる。また、雨・風・雲を主管する人がいたことから我が民族最初

乃移於唐藏京。後還此山。化爲神」(民族文化推進編(1996)『新增東國輿地勝覽5』舎出版社)

18) 『東國輿地勝覽』卷之五十一 平壤府「本三朝鮮高句麗之故都。唐堯戊辰歲有神人降太伯山檀木下國人立爲君都平壤。號檀君。是爲前朝鮮」(民族文化推進編(1996)『新增東國輿地勝覽6』舎出版社)

19) 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』教育人的資源部(文部省)

의國家が農耕を背景にして成立したことが推測できる<sup>20)</sup>。

以上その内容であるが、その中で「檀君の古朝鮮の建國はわが國の歴史が非常に古いことを物語ってくれる」の文章は、最初から檀君が歴史的事實であることを前提とする。その証據として、本文の下に『三國遺事』古朝鮮條の現代譯を資料としてそのまま載せている。次に「檀君の建國事實と弘益人間の建國理念は」とあるが、この「弘益人間」は『三國遺事』において、桓雄が天から地上へ降りてくる理由である<sup>21)</sup>。この「弘益人間」は、韓國の教育基本法第1條に教育理念として明示されている。その内容は、

教育は弘益人間の理念のもとに全ての國民をして人格を完成さしめ、自主的生活能力と公民としての資質を具有させ民族國家の發展に奉仕さしめ、人類共榮の理想實現に寄与し得ることを目的とする<sup>22)</sup>、

これは、韓國の教育の出發点でありかつ到達点といえるものである。これを踏まえることによって、本文の「檀君の建國事實と弘益人間の建國理念は」に續く「我が民族が危機に面するたび民族の自負心を呼び起こしてくれる原動力となった」という記事の意味する所のものが分かってくる。これは現在の理念でもって「弘益人間」を語る。つまり現在の理念によって作り出された過去から、現在の韓國の教育を保障するものとして登場している。『三國遺事』は何も「弘益人間」をその目的としているのではなく、「弘益人間」が歴史的に「我が民族が危機に面するたび民族の自負心を呼び起こしてくれる原動力となった」という記録はない。『三國遺事』からでた新しい歴史解釋いえるだろう。

また、「熊と虎が登場することから先史時代に形成された特定の動物を崇拜する信仰の要素が反映されている」や、「雨・風・雲を主管する人がいたことから我が民族最初の國家が農耕を背景にして成立した」はすでに『高等學校國史』述べたように、『三國遺事』神話の歴

20) 「단군의 고조선 건국 청동기 문화가 형성되면서 만주 요령(遼寧) 지방과 한반도 서북 지방에는 족장(군장)이 다스리는 많은 부족들이 나타났다. 단군은 이러한 부족들을 통합하여 고조선을 건국하였다. 단군의 고조선 건국은 우리나라의 역사가 매우 오래 되었음을 말해 준다. 또, 단군의 건국 사실과 홍익인간의 건국이념은 우리 민족이 어려움을 당할 때마다 자긍심을 일깨워 주는 원동력이 되었다. 그 밖에도 단군의 건국 이야기를 통해서 우리 민족이 처음 나라를 세웠을 때의 상황을 짐작해 볼 수 있다. 곰과 호랑이가 등장하는 것에서는 선사 시대에 형성되었던 특정 동물을 숭배하는 신앙의 요소가 반영되어 있음을 알 수 있다. 또, 비, 바람, 구름을 주관하는 사람이 있었다는 것에서는 우리 민족 최초의 국가가 농경 사회를 배경으로 성립되었다는 것을 짐작할 수 있다.」(國史編纂委員會·國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』教育人的資源部 p.18)

21) 『三國遺事』卷第一 紀異第一 古朝鮮條「下視三危太伯可以弘益人間」

22) 「교육은 홍익인간의 이념 이내 모든 국민으로 하여금 인격을 완성하고 자주적 생활능력과 공민으로서의 자질을 구유하게 하여 민족국가 발전에 봉사하며, 인류공영의 이상실현에 기여하게 함을 목적으로 한다.」文教法定編纂會(1988)『文教法定』教學社 p.14



史的解釋に他ならない。

さらに、章まだ最後の學習整理の項目があるが、第1章の1「内容の要旨」に가·나·다の三つの項目の中で最初の가의題目が「檀君建國の歴史的意義」で、その内容は「檀君の話は古朝鮮の歴史的事実であること物語る。・古朝鮮の領域は滿州と韓半島北部に渡る<sup>23)</sup>」となっている。檀君の古朝鮮建國の史實化のだめ押しとも言えるものである。

このように高等學校・中學校の國史教科書は共に『三國遺事』の記事を基にして檀君の古朝鮮建國を史實として捉える。すなわち『三國遺事』が歴史書として捉えられている。

### 3. 『三國史記』と『三國遺事』を互いに補完し古代史の組み立て

#### 3-1 高等學校の教科書における古代史組み立て

第2章「先史時代の文化と國家の形成」第2條「國家の形成」において、古朝鮮の次の項目「いろいろな國家の形成」で扶餘に續いて高句麗の記事がある。古朝鮮から扶餘までは『三國遺事』を元にして記述されているが、高句麗の項目に入ると冒頭から『三國史記』の記録によれば」と、ここで一轉して『三國史記』参照の記述に変わる。その内容は次の通りである。

##### 高句麗

『三國史記』の記録によれば、高句麗は扶餘から南に下った朱蒙が建國した(B.C.37)。朱蒙は扶餘の支配階級内の分裂・對立過程から迫害を避け南下し獨自に高句麗を建國した。高句麗は鴨綠江の支流である佟佳(家)江流域の卒本地方に位置を占めた。この地域は大部分高い山と深い溪谷で占められた山岳地帯であったため、農地が足りず努力しても食糧が不足がちであった。

高句麗は建國初期から周辺の小國を征服し平野地帯に進出しようとした。こうして、鴨綠江周辺の國內城に移り、五部族連合を土台として發展した。その後活發な征服戦争をとおして漢の群縣を攻略し遼東地方に進出するだけでなく、東は赴戰高原を越え沃沮を征服し貢物を受けた。

ここで問題となる高句麗建國神話の歴史的解釋の部分である「朱蒙は扶餘の支配階級内の分裂・對立過程から迫害を避け南下し獨自に高句麗を建國した。高句麗は鴨綠江の支流

23) 「가. 단군 건국의 역사적 의의. ·단군 이야기는 고조선 건국의 역사적 사실을 말해 준다. ·고조선의 영역은 마누와 한반도 북부에 걸쳐 있었다」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』教育人的資源部 p.25)

である修佳(家)江流域の卒本地方に位置を占めた』の『三國史記』の記事をみれば、次のようになる。

金蛙王には七人の子がいた。いつも朱蒙と遊んでいたが、その技能が皆朱蒙におよばなかった。長男の帶素が王に「朱蒙は人間が生んだ者でないから、その人となりか勇猛なので、もし早く始末しなければ、後々の心配の種と成りましょう」と言って、朱蒙を除くことを勧めた。……………王子および諸臣はまた朱蒙を殺そうと図った。朱蒙の母はかげでこの事実を知り「國の人たちがまさに汝を殺そうとしている。汝の才能ならどこへ行つたていいではないか。ここにいつまでも留まっていた害を受けるよりは、遠くに行つてことを図つた方がいい」と、告げた。朱蒙はすぐ烏伊・摩離・陝父ら三人と友となり三人で出發して、淹淲(一名今の鴨綠江の東北にある)に至つて川を渡ろうとしたが橋がなかった。追手の兵が迫ってくるのを恐れ、川に向かつて「私は天帝の子であり、河伯の外孫である。今、逃げる途中だが、追手が迫ってくる。どうしたらいいだろうか」と告げた。この時、魚や鼈たちが上に浮かび出て、橋を架けてくれたので朱蒙たちは川を渡ることができたが、魚や鼈たちが解いて姿をかくすと追手の兵は渡ることができなかった。……………卒本川に至つた<sup>24)</sup>。(『三國史記』卷十三 高句麗本紀第一)

即ち、これを要約すれば「金蛙王の子は朱蒙の能力を恐れ、朱蒙を殺そうと図る、このため朱蒙は逃亡して卒本川に到着して高句麗を建國する」で、この『三國史記』の高句麗建國神話部分の歴史的解釋が、教科書の『三國史記』の記録によれば、高句麗は扶餘から南に下つた朱蒙が建國した(B.C.37)。朱蒙は扶餘の支配階級内の分裂・對立過程から迫害を避け南下し獨自在高句麗を建國した。高句麗は鴨綠江の支流である修佳(家)江流域の卒本地方に位置を占めた』となる。では、『三國遺事』ではこの部分はどうなっているのか。

金蛙王には七人の子がいて、いつも朱蒙と遊んでいたが、技能はとうてい朱蒙におよばなかった。長男の帶素が王に「朱蒙は人間が生んだ者でないから、早く始末しなければ、後々心配の種になるでしょう」といった。……………王の多くの子と臣下たちがまさに朱蒙を殺そうと謀ると、朱蒙の母はこれを知り「國の人たちがまさに汝を殺そうとしている。汝の才能ならどこへ行つたていいではないか。早く逃げなさい」と、告げた。そこで朱蒙は烏伊ら三人で友となり、淹淲(今未詳)に至つて川を渡ろうとしたが橋がなかった。追手の兵が迫

24) 『三國史記』卷十三 高句麗本紀第一「金蛙有七子。常與朱蒙遊戲。技能莫及。長子帶素言於王曰。朱蒙非人所生。若不早圖。恐有後患。請除之。……………王子及諸臣又謀殺之。朱蒙母陰知之。告曰。國人將害汝。以汝才略。何往而不可。與其遲留而受辱。不若遠適以有爲。朱蒙乃與烏伊、摩離、陝父等三人爲友。行至淹淲(一名蓋斯水。在今鴨綠東北)欲渡無梁。恐爲追兵所迫。告水曰。我是天帝子。河伯外孫。今日逃走。追者垂及如何。於是魚鼈浮出成橋。朱蒙得渡。魚鼈乃解。追騎不得渡。……………至卒本川」

ってくるのを恐れ、川に向かって「私は天帝の子であり、河伯の孫である。今、逃げる途中だが、追手が追ってくる。どうしたらいいだろうか」と告げた。この時、魚や鼈が橋と成る。朱蒙たちは川を渡ることができたが、魚や龜たちが橋を解いて追手の兵は渡ることができなかった。卒本川に至った<sup>25)</sup>。(三國遺事』卷一 紀異一 高句麗)

上で見たように、『三國遺事』の高句麗建國神話も要約すれば、『三國史記』と同じく「金蛙王の子は朱蒙の能力を恐れ、朱蒙を殺そうと図る、このため朱蒙は逃亡して卒本川に到着して高句麗を建國する」。このように朱蒙の建國神話は『三國史記』と『三國遺事』とは酷似している。つまり、別に『三國史記』の記録によれば……………」である必要がなく、『三國遺事』の記録としても問題はない。さらに、百濟・新羅・伽耶の建國については、「『三國史記』の記録によれば」と記載されていないが、百濟・新羅・伽耶の建國年代は『三國史記』『三國遺事』の建國神話の記事をそのまま参照している。

- ・百濟は漢江流域の土着勢力と高句麗系統の流民勢力が結合し成立したが(B.C.18)<sup>26)</sup>
- ・新羅は最初辰韓の小國の一つ斯盧國から出發したが、慶州地域の土着民集団と流民集団の結合により建國した(B.C. 57)<sup>27)</sup>
- ・連盟の盟主である金官伽耶は金首露により建國されたが(42)<sup>28)</sup>

百濟建國の記事は『三國史記』卷二十四百濟本紀第一始祖溫祚王・『三國遺事』卷二紀異第二南扶余・前百濟・北扶余、新羅建國の記事は『三國史記』卷一新羅本紀第一始祖赫居世居西干・『三國遺事』卷第一紀異第一始祖赫居世王、伽耶國建國の記事『三國遺事』卷第一紀異第一五伽耶だけで『三國史記』にはない<sup>29)</sup>。さらに、高麗へ続く最後の歴史部分である後三國時代を築いた弓裔・甄萱の『三國史記』記事内容を資料としてのせている。このように、『三國史記』『三國遺事』のお互いの記事を補完しながら歴史を組み立てていることが分かる。

- 25) 『三國遺事』卷一 紀異一 高句麗「金蛙有七子。常與朱蒙遊戲。其伎能皆不及朱蒙。其長子帶素言於王曰。朱蒙非人所生。其爲人也勇。若不早凶。恐有後患。…………… 王子及諸臣又謀殺之。蒙母知之。告曰。國人將害汝。以汝才略。何往不可。宜速凶之。於時蒙與烏伊等三人爲友。行至淹水(今未詳)告水曰。我是天帝子。河伯孫。今日逃遁。追者垂及。奈何。於是魚鼈成橋。得渡而橋解。追騎不得渡。至卒本川
- 26) 「백제는 한강 유역의 토착 세력과 고구려 계통의 유이민 세력의 결합으로 성립되었는데 (B.C. 18)」國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)『高等學校 國史』教育人的資源部(文部省)p.49
- 27) 「신라는 처음 진한 소국의 하나인 사로국에서 출발하였는데, 경주 지역의 토착민 집단과 유이민 집단의 결합으로 건국되었다(B.C. 57)」國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)『高等學校 國史』教育人的資源部(文部省)p.50
- 28) 「연맹의 맹주인 금관 가야는 김수로에 의하여 건국되었는데(42)」國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)『高等學校 國史』教育人的資源部(文部省)p.50
- 29) 金官伽耶國の名は『三國史記』卷一新羅本紀第一脫解尼師今條などに見られるが、建國の話はなく、『三國遺事』で見られるだけである。

### 3-2 中學校の教科書における古代史組み立て

中學校の「國史」の教科書において、檀君の古朝鮮建國に續く三國時代の建國の記事は、『三國史記』や『三國遺事』を引用したとは書かれていないが、その内容は『三國史記』と『三國遺事』の建國神話の記事の歴史的解釋そのものである。

まず高句麗建國であるが、教科書には「高句麗は三國の中で最初に國の形を整えた。高句麗の支配勢力は扶余系統の移住民であったが、鴨綠江の支流である佟佳(家)江流域の土着民と合流し國を建てた(紀元37)<sup>30)</sup>」となっている。土着民と合流して國を建てたと言うのは、すでに高等學校の教科書で説明したところで、また年代も『三國史記』と『三國遺事』の記事そのまま史實として受け入れている。

次に百濟建國、「百濟は北から降りてきた流移民たちが漢江流域の慰礼城を本據地とし馬韓の一つの國である百濟國として始まった(紀元18)<sup>31)</sup>」。さらに新羅建國、「新羅は辰韓の國々のなかで慶州平野にあった斯盧國から始まった(紀元57)。新羅は朴・昔・金の三姓の始祖説話からみられるように、いくつかの勢力集団が連合してなった國であったので、國家的統合が比較的遅れた<sup>32)</sup>」。このように高句麗と同じく、その内容は『三國史記』と『三國遺事』の建國神話の歴史的解釋に他ならない。新羅の記事などは「三姓の始祖説話からみられるように」と、『三國史記』と『三國遺事』の記事を前提として述べられている。

さらに、高句麗建國の記事に對しては、『廣開土王碑文』を資料として載せている<sup>33)</sup>。『廣開土王碑文』はすでに權五曄氏によって明らかにされているように、純粹な歴史書とは言えず、そこには高句麗を世界の中心とする世界觀が描かれ、その秩序の中心として高句麗の王が存在する<sup>34)</sup>。

以上のように、中學校の教科書も高等學校の教科書と状況は同じである。これを表にすると、表1・2ようになる。ここで、教科書の内容が『三國史記』また『三國遺事』の記事の歴史的解釋見られるものに○付けた。また内容がどちらか單獨である場合は◎を付けた。

30) 「고구려는 삼국 중에서 가장 먼저 나라의 모습을 갖추었다. 고구려의 지배 세력은 부여 계통의 이주민이었으며, 압록강 지류인 동가강유역의 토착민들과 힘을 합하여 나라를 세웠다(기원전 37)」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』教育人的資源部 p.33)

31) 「백제는 북쪽에서 내려온 유이민들이 한강 유역의 위례성에 자리잡으면서 마한의 한 나라인 백제국으로부터 시작되었다(기원전 18)」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』教育人的資源部p.35)

32) 「신라는 진한의 여러 나라 가운데 경주 평야에 있던 사로국에서 시작하였다(기원전 57). 신라는 박, 석, 김 3성의 시조 설화에서 보듯이, 여러 세력 집단이 연합하여 이루어진 나라였기 때문에 국가적 통합이 비교적 늦었다」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』教育人的資源部p.38)

33) 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』教育人的資源部 p.23

34) 權五曄(2000),『廣開土王碑文의천하구성』日本文化學報 9 輯p.391

國名	教科書の建國神話の歴史的解釋			參考事項
	『三國史記』	『三國遺事』	その他の史書	
古朝鮮		◎	帝王韻紀・東國輿地勝覽	本文に『三國遺事』引用
衛滿朝鮮		◎		
扶余		◎		
高句麗	○	○		本文に『三國史記』引用
沃沮 東濊		◎		
三韓		◎		
百濟	○	○		
新羅	○	○		
伽耶		◎		
後三國時代	○	○		参照として『三國史記』

表1『高等學校 國史』

國名	教科書の建國神話の歴史的解釋			參考事項
	『三國史記』	『三國遺事』	その他の史書	
古朝鮮		◎		参照として『三國遺事』
衛滿朝鮮		◎		
扶余		◎		
高句麗	○	○		参照として『廣開土王碑文』
沃沮 東濊		◎		
三韓		◎		
百濟	○	○		
新羅	○	○		
伽耶		◎		
後三國	○	○		

表2『中學校 國史』

このように表にしてみると、高等學校・中學校の「國史」教科書はともに、『三國遺事』が圧倒的多く、『三國遺事』だけで古代史を形成できる。ここで、『三國史記』の必要性は、高句麗・百濟・新羅など『三國史記』と『三國遺事』の両方に出ている場合において、その共通部分だけで歴史を組み立てるためである。それを端的に表しているのが、檀君を天帝の子であることを重要視して記述しているにも関わらず、高句麗・百濟・新羅の始祖と天との關係に對しての記述を避けている。これは、『三國史記』と『三國遺事』の記述が相違を見せているためである。たとえば、新羅の始祖についてであるが、

・新羅一始祖朴赫居世

『三國史記』: 馬の姿は忽然と消え、そこに大きな卵が残っていた<sup>35)</sup>。

35) 『三國史記』新羅本紀 始祖赫居世居西干「有馬跪而嘶。則往觀之。忽不見馬。只有大卵。……………」

『三國遺事』: 馬は空に舞い上がり、そこに大きな卵が残っていた<sup>36)</sup>。

『三國遺事』では、「馬が空に舞い上がる」ことから、赫居世が出てきた卵は空から降りてきたことを示し、人々も天子が天から降りて来たと言っている<sup>37)</sup>。また、赫居世は在位六一年に天に戻っている<sup>38)</sup>。元々いた六村の祖先が全て天から降りてきたと記載されており、これも天の意志によって國が開かれていることを明確にしている。しかし、『三國史記』においては、「馬の姿は忽然と消え」で、天との明確なコンタクトを示さない。共通して現われていない部分は削除されたのか、荒唐無稽として排除したの分からないが、共通でない部分は削除される傾向である。

「檀君の古朝鮮建國のところ、(檀君の古朝鮮建國) 檀君の建國に関する記録は三國遺事・帝王韻紀・東國輿地勝覽などに記載されている<sup>39)</sup>」と注を付けているにも関わらず、『三國遺事』の記事を優先したのとは大きな違いである。これは、『三國史記』と『三國遺事』の神話が、元々同じ神話から派生したとみる、一元的な神話論を根據として、『三國遺事』がそのまま歴史となり、そして『三國史記』と一緒にして古代史を組み立てようとするためである。ここに、『古事記』と『日本書紀』を「記紀神話」としてひっくり返して考えてきた過去の過ちを繰り返しているといえる。

## 4. おわりに

『三國遺事』の神話が史實として、韓國中等教育「國史」教科書に記述され、さらに『三國史記』やその他の書と補完しながら「國史」教科書を完成させていることが分かっていたと思う。これは、今までの『三國遺事』の研究史が史實化の研究史であったことの結果であり、かつ『三國史記』と『三國遺事』の神話を、一元神話論から元々同じ一つの神話から派生したと見てきた結果である。

これは、本人の『三國遺事』に対する研究の立場と相反するものであり、本論文はその確認とも言えるものである。これを踏まえ、以後の研究として冒頭で述べたように、『三國遺事』を文學作品として読み、そこに現われた思想、つまり民族・國家を保障すべきその時代の人々が納得し得た世界觀を追求するものである。

36) 『三國遺事』紀異卷第一 新羅始祖赫居世王『三國遺事』紀異卷第一 新羅始祖赫居世王「有一白馬跪拜之狀。尋檢之。有一紫卵(一云青大卵)。馬見人。長嘶上天。……」

37) 『三國遺事』紀異卷第一 新羅始祖赫居世王「時人爭賀曰。今天子已降。……」

38) 『三國遺事』紀異卷第一 新羅始祖赫居世王「理國六十一年。王升干天。……」

39) 「(단군의 고조선 건국) 단국의 건국에 관한 기록은 삼국유사 제왕운기 동국여지승람 등에 나타나고 있다」 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等學校 國史」 教育人的資源部(文部省)p.34

## 【參考文獻】

- ・民族文化推進編(1996)『新增東國輿地勝覽 1』솔出版社
- ・民族文化推進編(1996)『新增東國輿地勝覽 5』솔出版社
- ・民族文化推進編(1996)『新增東國輿地勝覽 6』솔出版社
- ・金慶洙譯(1999)『帝王韻紀』凶書出版 p.1, 134, 136
- ・國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』教育人的資源部(文部省) pp.18-38
- ・國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『高等學校 國史』教育人的資源部(文部省) pp.34-50
- ・民族文化研究所編(1984)『三國遺事研究上』嶺南大學出版局 p.4
- ・末松保和(1964)『三國遺事解說』學習院東洋文化研究所本 p.2
- ・金東旭(1968)『三國遺事』韓國의名著 p.142
- ・金鍾權(1993)『完譯三國史記』明文堂
- ・崔南善編(1999)『三國遺事』瑞文文化社
- ・李恩奉(1986)『壇君神話研究』은누리 pp.85-97
- ・李基白(1990)『壇君神話論集』새문社 pp.23-52
- ・李福揆(1998)『扶余·高句麗建國神話研究』집문당 pp.28-29
- ・河炫網(1989)『韓國中世論』新丘文化社 p.7, 34, 95, 100, 103
- ・李佐成・姜萬吉編(1999)『韓國의歷史認識上』創作과批評社 p.111-145
- ・民族文化研究所編(1984)『三國遺事研究上』嶺南大學出版局 p.1-10
- ・고운기(2001)『일연과 삼국유사의 시대』도서출판 원인
- ・韓國史研究會編(1981)『韓國史研究入門』知識產業者
- ・金鍾權(1984)『三國史記』明文堂 pp.1-3, 237-239, 381
- ・『三國遺事』大韓佛教曹溪宗 僧伽大學院 1998年
- ・朴性鳳・高敬植(1985)『譯解 三國遺事』瑞文文化社 pp.396-402

## 要 旨

本人は、完結した文學作品として『三國遺事』を見る。しかし、『三國遺事』の研究史は、史實化の歴史であったと言っても過言でない。その結果が、韓國の高等學校・中學校の「國史」の教科書に明確にあらわれている。

高等學校の國史の教科書『高等學校 國史』本文は、「部族社會において最初に國家として發達したのが古朝鮮であった」と、古朝鮮の存在を史實として確認することからはじまる。さらに、『三國遺事』の歴史的解釋と思われる内容が續き本文を形成している。また、『中學校 國史』には、「檀君の建國事實と弘益人間の建國理念は」とあるが、この「弘益人間」は『三國遺事』において、桓雄が天から地上へ降りてくる理由である。この「弘益人間」は、韓國の教育基本法第1條に教育理念として明示されている。これは、韓國の教育の出発点でありかつ到達点といえるものである。それを踏まえて、本文に「我が民族が危機に面するたび民族の自負心を呼び起こしてくれる原動力となった」とある。これは現在の理念でもって歴史を解釋しており、『三國遺事』が意味するところではない。

また、古朝鮮から扶餘までは『三國遺事』を参照して記述されているが、高句麗の項目に入ると冒頭から「『三國史記』の記録によれば」と、ここで一轉して『三國史記』参照の記述に変わる。しかし、朱蒙の建國神話は『三國史記』と『三國遺事』とは酷似しており、別に「『三國史記』の記録によれば……」である必要がなく、『三國遺事』の記録としても問題はない。これは、『三國史記』と『三國遺事』の神話が、元々同じ神話から派生したとみる、一元的神話論を根據として、『三國遺事』がそのまま歴史となり、そして『三國史記』と一緒にたにして古代史を組み立てようとするためである。ここに、『古事記』と『日本書紀』を「記紀神話」としてひっくるめて考えてきた過去の過ちを繰り返しているといえる。

『三國遺事』の神話が史實として、韓國中等教育「國史」教科書に記述され、さらに『三國史記』やその他の書と補完しながら「國史」教科書を完成させていることが分かっていたらと思う。

キーワード：三國遺事 國史教科書 史實化 檀君神話 一元的神話論 多元的神話論

투 고 : 2004. 11. 30

1차 심사 : 2004. 12. 11

2차 심사 : 2005. 1. 4

住 所 : (570-749) 전북 익산시 신용동 344-2 원광대학교 사범대학 일어교육학과

電 話 : 063-850-6523(직통) 063-850-6520(사무실)

e-mail : kannan@wonkwang.ac.kr